２０２２年度南山大学大学院法務研究科法務専攻

＜専門職学位課程＞　入学試験　Ａ日程

（２０２１年７月１０日実施）　試験科目：法律科目試験・刑法　配点：１００点

次の問題文を読み、設問Ⅰ・Ⅱに答えなさい。共犯関係については、設問Ⅰ・Ⅱのなかで適切に処理すること。

【問題文】

1. ＸとＹは、家に多額の「タンス預金」をしているという噂の資産家Ａ（独居老人）から現金を奪うことを計画し、Ｘが電話で人気のない場所にＡを呼び出して、ふたりで拉致したうえで監禁し、Ａの監禁中にＡ宅から現金を奪う段取りを決めた。某日の夕刻、計画通りに、Ｘは電話で閑散とした南山公園にＡを呼び出し、ＹとふたりでＡの身体を拘束して、Ｙが用意してきた自動車の後部座席に無理やりＡを押し込め、ＸがＡの身体を押さえ、Ｙが自動車を運転してＡを廃屋となっている工場跡に連行した。
2. ふたりでＡを工場の一室に連行した後、Ｘが「お前の家の鍵を出せ。おとなしく出さなければ生命の保証はないぞ」と申し向けて、ＡからＡ宅の玄関の鍵を奪った。Ｘは、Ａ宅の鍵をＹに渡して、「俺は、ここでＡを見張っているから、お前がＡ宅に行って現金を取ってこい」と言い、ＹはＡ宅に向かった。
3. Ａ宅に到着したＹは、Ａから奪った鍵を使ってＡ宅の玄関から侵入し、家中を物色したうえで、現金800 万円を入手した。Ｘの待つ工場跡に向かう途中、入手した現金の額をＸが知り得ないことに気づいたＹは、途中のＪＲの駅に立ち寄り、300 万円を駅のコイン・ロッカーに預けた。工場跡に戻ったＹは、Ｘに、「意外と現金が少なかった」と言って、残りの 500 万円を示した。その後、ふたりは、250 万円ずつを山分けにし、Ａを南山公園に運んで解放したうえで、Ｙの自動車で逃走した。

設問Ⅰ　本件のＸの行為について、罪責を検討しなさい。

設問Ⅱ　本件のＹの行為について、罪責を検討しなさい。

２０２２年度南山大学大学院法務研究科法務専攻

＜専門職学位課程＞　入学試験　A 日程

（２０２１年７月１０日実施）　　試験科目：法律科目試験・憲法　　配点：１００点

以下の文章（フィクション）を読み、【設問】に答えなさい。

Y 県知事は、疫病のまん延防止のために、方策の一つとして、人流を抑制する目的で、生活必需品以外の販売を小売商業施設等販売業者に禁止すると共に、飲食店など飲食の提供を目的とする業種に対しても、県条例に基づき一律に休業するよう命令した。

これに対して、飲食業を営む者たちは、Y 県下の同業者全員に連絡を取り、連絡会議 Z を結成した。そして、Z は、休業命令によって売り上げがなくなれば、家賃も人件費も支払うことができなくなり、早晩廃業に追い込まれることは明白と考え、Y 県知事のそれら措置に反対し、従わないことを決議した。この決議に基づいて飲食店を営む X は営業を継続した。

ところが県条例には、知事の措置に強制力を持たせるために、命令違反については罰則規定が設けられており、X はそれによって処罰されることとなった。

【設問】

営業の自由とその規制に関して述べ、その上で本件について論じなさい。なお、法律と条例との関係について論ずる必要はない。

２０２２年度南山大学大学院法務研究科法務専攻

＜専門職学位課程＞　入学試験　A 日程

（２０２１年７月１０日実施）　　試験科目：法律科目試験・商法　　配点：１００点

次の文章を読んで、各設問に答えなさい。

X 株式会社の取締役である Y は、A 事業（事業の内容は問わない）が違法であることを明確に認識しながらも、当該事業に X の資金を投入し、多額の損害を発生させた結果、Z が保有する X に対する債権が回収できなくなってしまった。なお、Z が保有する X への債権は、A 事業とは関係ない取引によって発生している。

（設問 1）　Y の X に対する責任について説明しなさい。
（設問 2）　Y の Z に対する責任について説明しなさい。

２０２２年度南山大学大学院法務研究科法務専攻

＜専門職学位課程＞　入学試験　A 日程

（２０２１年７月１０日実施）　　試験科目：法律科目試験・民法　　配点：２００点

Ⅰ　以下の文章を読んで、設問に答えなさい。

X はかねてからの知人である B（Y の子）より、A 会社（B が経営者となっている）に資金を貸してくれるように依頼を受けたが、A 会社の経営状態に不安があった X は他に保証人があれば安心だと考え、B に対して「Y の保証があれば資金を貸してもよい」と答えた。そのため、B は、以前より、Y 所有の不動産について移転登記の依頼を受け、実印および印鑑証明を預かっていたことを奇貨として、X に対し、Y の「保証は大丈夫だ」と述べて X を安心させた。

その後 B は、X 作成の保証人欄が空白の保証契約書を受け取り、Y の承諾を得ないままその保証書に Y の名前と住所を記入して、X に渡した。この保証書に基づき、とくに Y に対して問い合わせることもせず、X は A 会社に 3000 万円の資金を貸した。

後になって、A 会社が倒産したため、X から Y に対して保証契約に基づき、貸した金を返還するように求めた。Y は全く知らないことなので、そのような保証契約をしたことはないと答えた。

設問（1）　このような Y の返答に対し X はどのように反論することが考えられるか、答えなさい。

設問（2）　設問(1)における X の反論は認められるべきか、答えなさい。

Ⅱ　以下の文章を読んで、設問に答えなさい。

画廊を営む A は、友人で新進の画家 X から預かった本件風景画を自宅内に保管したまま死亡した。A の唯一の相続人である娘の B は、本件風景画を A の遺産であると誤信し、B 自身が相続したものとして、B が経営する料亭の座敷に持ち込んで飾っていた。最近になり、B は、知人 Y に本件風景画を 100 万円で譲渡したが、BY 間において、当分の間本件風景画を B が借り受けることが合意され、その料亭内で陳列されていた。

設問　その後、本件風景画は Y に現実に引き渡されたが、その時点では、Y は本件風景画が X の所有のものであることを知っていた場合、X は Y に対して、その返還を求めることができるか。